

# 北宋剽員制管見

——宋代兵制史研究の一環として——

小岩井 弘 光

## 一 はじめに

### 二 剽員制の推移

- (イ) 創始
  - (ロ) 剽員の分化
  - (ハ) 剽員の二、三の特色
  - (ニ) 剽員再分化への流れ
  - (ホ) 帶甲剽員の衰退
  - (ヘ) 剽員制の整備
  - (ト) 剽員の統属
- ### 三 剽員の役使
- (イ) 兵士役使の背景
  - (ロ) 剽員役使の具体例 その一
  - (ハ) 剽員役使の具体例 その二
- ### 四 おわりに

## 一 はじめに

宋代軍事力の中核は募兵制に立脚する禁軍にあったが、その質・量

二面での維持には召募や揀退が行われた。その際の方策として、廂軍との間での昇降も重要であったが、老弱の兵士に対しては直接的罷免もあり得た。但しこの方策は余りにも急激な処置で兵士に不満を生じさせるなど、募兵制維持の面からも支障が感じられる。そこで何らかの緩衝的方策がとられ、兵士に老後の希望を与えることが出来れば長期安定的な軍事力の維持も可能ということになる。ここに剽員の存在が注目されることになる。

この剽員については、宮崎市定博士によって「剽員とは老齡などの為に額外とされた軍人を言う<sup>(1)</sup>」と簡潔な説明が与えられている外、専門論はないようである。そこで小稿では、宋代兵制考察の一端として、北宋を中心として剽員の制度的推移や任務について管見を加えんとするものである。

## 二 剽員制の推移

### (イ) 創始

剽員の概略的知見は事物紀原<sup>(卷一〇、軍)</sup><sub>(伍名額部)</sub>により与えられる。先ず「剽

員」の項に、

真宗咸平五年七月四日、以軍士三十三人隸剩員、皆支體廢者、不忍遽棄、令廩給如故、自是以為例、

とあり、真宗咸平五(一〇)年に肢體劣弱の兵士を放置するに忍びず、給与を故のままに剩員とし、以後の先例となったという。同卷には「帶甲剩員」の項もあり、

大中祥符五年八月、詔河東諸州軍、昨簡隸剩員者、如聞尚多強壯、可併帶甲剩員以備給使

と記すから、右の両記事から真宗朝に剩員はあり、大中祥符五(二〇)年には河東にも存在する全国的制度であり、帶甲剩員への分化もあり、彼らが無為に放置されることなく、給使にあてられたことが判明する。かくて剩員について一応の概念は得られたかと思うが、問題も存在する。即ち咸平五年の記事は、三十三人という限られた兵士について「支體廢者」という条件がつき、恩恵的に剩員とし、廩給にも変更ないとするものであるからである。これでは揀兵の実は拳がらず、かかる処置が全ての兵士に適用されたならば、これに代る兵士は増加し、給与支出の国家負担も増大するばかりとなる。従って右の剩員の記事は特例的な記載であり、これに先行して剩員制は存在し、給与の面などでも別の一般的規定があったとみるべきであろう。そこで改めて剩員の創始の点から考えるならば、宋史卷一八七、兵志一、禁軍上に、

建隆元年、詔殿前侍衛二司、各閱所掌兵、揀其驍勇、升為上軍、老弱怯懦、置剩員以処之、詔諸州長吏、選所部兵送都下、以補禁

旅之闕、又選強壯卒、定為兵樣、分送諸道、其後代以木梃、為高下之等、散給諸州軍、委長吏都監等、召募教習、俟其精練、即送闕下、二年、云云、

とあり、建国早々の建隆元(九六)年に一連の中央・地方の兵士の揀抜の処置が行われ、併せて老弱怯懦の兵士を剩員としたかに見える。然し、この一連の処置の年次には検討を要するのであって、統資治通鑑長編(以下、長編と略称)に關連記事を尋ねると、卷二、建隆二年十一月甲子条に、西郊での大閱の折太祖が衛士について語った言として、

朕頃案籍閱之、去其冗弱、又親校其擊刺騎射之芸、今悉精銳、

とあり、卷六、乾德三(九六)年八月戊戌朔条には、禁旅の闕員に關つて、

今天下長吏、擇本道兵驍勇者、籍其名送都下、以補禁旅之闕、又選強壯卒、定為兵樣、分送諸道、其後又以木梃為高下之等、給散諸州軍、委長吏都監等、召募教習、俟其精練、即送都下、

とあり、宋史に記す揀抜の具体的処置は建隆二年以降に累次行われたと解される。事実、宋史も同卷建隆以來之制にみえる竜衛(侍衛驍軍所屬)には、具体的に、

建隆二年、揀去衰老、以諸州所募精勁者補之、

と記すのである。そこで特に剩員について長編の記述を求めると、卷二、建隆二年五月甲戌条に、

令殿前侍衛司及諸州長吏、閱所部兵、驍勇者升其籍、老弱怯懦者去之、初置剩員、以處退兵、

とあり、建国二年目にして揀選が行われ、同時に老弱怯懦なる兵士が

剩員に充てられたといえる。周知の如く、この年太祖は杯酒の間に藩鎮の武力を除く強幹弱枝の策をとるのであって、この年に剩員創始を認めるのが妥当といえよう。なお、設置の地域も長編に中央の殿前司、侍衛司、地方の諸州長吏に令を下しているから、支配領域全てを対象としていたことになるが、乾徳元年二月に荊南の高繼冲が帰朝を請う(宋史)た後として、長編卷四、同年六月壬辰条に、

詔、荆南兵、願歸農者聽、官為葺舍給賜耕牛種食、願留者、分隸復・郢州為剩員、

とあり、新たな帰順兵士も剩員となっているから、剩員の全てが老弱怯懦なる者でなきを知ると共に、領域拡大とともに適用地域も拡大されたことを知るのである。

要するに剩員は真宗朝に始るのではなく、建国数年の間に強幹弱枝の施策に関り、中央・地方を問わず、老弱の退兵の処置を主目的に設置されたとみてよからう。

#### (四) 剩員の分化

さて、国初以来各処に生れた剩員も時間の経過と共に増額し、何らかの処理が生じたに違いない。宋史卷一八七、兵志一、禁軍上、建隆以来之制の記載によれば、侍衛歩軍の雄勝軍は、

開宝中、以剩員立、

とあり、揀中雄勇軍は、

開宝中立、以常寧、雄勇、効順等軍剩員中、選其強者為揀中、

とあり、開宝年間(九六八―九七五)に剩員のための軍額が生れ、更に剩員のうち

の強者を揀抜した揀中剩員すら設置されており、侍衛騎軍の雲騎の場合には、

(開宝以後)又選本軍年多者為帶甲剩員、

とあり、老齢なるも(なお体力のある)兵士を帶甲剩員となしており、竜衛の場合にも、

淳化三年、選剩員堪披甲者、為帶甲剩員、

とあり、事物紀原に記す真宗朝に先立って太宗淳化三(九六二)年には帶甲剩員が剩員中から析出されているのである。

要するに、国初老弱怯懦の兵士を中心に剩員が設置されただけでなく、間もなく剩員の組織化がはかられ、更に披甲にたえる帶甲剩員などの分化が行われたのである。

もとより老弱が極まれば剩員からも罷退されるはずであり、これも分化の一面といえる。長編卷六〇、真宗景德二(一〇五一)年六月辛巳条に、

有司言、契丹清朔禽戎剩員兵士十八人、老病当停、詔殿前司、詢問、無親屬者、許仍旧、願停者從其便、上以異域歸順之人、老而擯退、或無所依故也、

とあるのは本来老病により罷退さるべき剩員の例外的事例といえよう。但しこれをもってしても、どの程度で罷退すべきかは判明せず、先の剩員と帶甲剩員、更には一般兵士との区分規準の不明なることも同様である。そこで剩員分化の始った段階で、剩員の基本的特色ともいふべき二、三の点に整理を加えておきたい。

## (ハ) 剩員の二、三の特色

先ず給与についてみれば、事物紀原では咸平五年の三十三人の剩員は給与に変更なく、その後の先例となった如く記述されていたが、これを剩員全てに適用し得るかについては既に疑問を提しておいた。幸に該当記事の子細は長編卷五二、咸平五年五月乙巳条にみえる。

〔先是〕環慶路部署言、軍士涉雪討蕃部苦寒、有支體廢墮者、今遣還京師、上念其久勞、不忍遽棄、令中使就賜緡錢藥酒、以隸剩員、凡三十三人、廩給如故、自是遂為定例。剩員在七月丁酉、今並書之

とあるのがそれで、要旨は肢体廢墮で本来ならば廢兵たるべき者を戦陣の労苦を考慮して剩員とし、廩給如故としたのである。つまり右の処置は特例であり、本来の剩員は全くの老廢者でもなく、老弱の程度に準じた給与が支給されたものとみるべきである。そのことは長編卷七七、大中祥符五(一〇)年四月辛丑条の記事で了解される。即ち、

詔、承前遣使取内外軍中疲老、咸給俸糧之半、以隸剩員、今可簡閱使帰農業、其合留者、亦據逐營給役、數外別為營舍処之、内契丹渤海女真本外国人、停之慮無所帰、可如其旧、云云、

とあり、要旨は、当時疲老の兵士が剩員にあてられたが、従前の俸糧の半額が支給されていた。これを簡閲して帰農させよ。残留兵士は所屬營舍で役使に給し、その他は營舍を別に処らしめよ。契丹等の外国出身兵士は帰所のないのを考慮しそのままにせよ、というものである。ここに疲老の者であつて、俸糧の半額が支給されたことが基本的特色として明らかとなる。そして半俸が支給される程の疲老者という事で、

なお多少の役使に充てられたのであり、剩員のみを營舍に集めた場合もあつたのである。では何故にこの時点で契丹兵等を除く剩員に簡閲を施し帰農を計ったかといへば、長編卷七八、大中祥符五年七月癸酉条に、

緣辺禁兵老病当停者、詔隸本州剩員、如聞侵費辺儲、煩于転送、宜令転運使関驗、咸遣帰農、

とあるによつて、たとえ半糧に減じたとはいえ、老廢の兵士が剩員として全国に存在することは国家財政に大きな負担となつていたためと解釈される。そして四月の詔によれば、簡閲によつて残すべき剩員が別に營舍を造つておらしめるほどなお多数あつたのであるが、同書同卷、同年八月庚戌条には、

詔、河東諸軍、昨簡隸剩員、如聞尚多疆壯、可併為帶甲剩員、以便給使、

とあり、更に帶甲剩員として利用せんとする動きのあるのは当然といえよう。以上、長編の大中祥符五年四月から八月の記事を尋ねたのであるが、この間の知見を更に深め得る記載が宋史卷一八九、兵志三、廂兵の大中祥符五年二月に年次を繋げた、上諭、宣示、詔等の記事である。先の宋史禁軍の記載同様、明確に月日を比定出来ぬのが残念であるが、その宣示と解される一文を掲げると、

殿前侍衛馬歩軍司、自来揀下披帶禁軍、量減衣賜月糧充剩員、並無定額、散在逐營拘繫、不獲營生、官中所給歲計不少、可乘此時一例揀選、除老病者放帰農外、拋諸軍見管人數額定充看管剩員、

餘並撥併一処収管、以備令赴諸処祇應、既有定額、必不敢多揀充剩員、

とある。又統いて、長編の四月辛丑の詔と照応する詔の一文を掲げると、

承前遣使、取内外軍中疲老者、咸給奉糧之半、以隸剩員、今可簡閱使帰農、其合留者、亦擲逐營給役、數外別為營舍処之、内契丹渤海日本外国人、慮無所歸、且依旧、云云、

とある。兩記事を併せ考えるに、先ずは俸糧之半とあった剩員の給与は糧米のみでなく、衣料等をも減額支給するものであるから、禁軍の場合、料錢も減額支給されたとみてよからう。次に従来剩員に定額がなかったのが、財政負担軽減の処置として定められ、看管剩員と称しているが、これこそ先掲の逐營にあって役使に給される剩員に相当しよう。又、看管剩員以外に新に營舍にまとめられた剩員も諸処の祇応という役使に充てられたのである。

要するに剩員の主体は析出された疲老の兵士よりなり、従来の給与のほぼ半額が支給されていたが、大中祥符五年前後の処置により定数が定められ、従前の營舍にある剩員は看管剩員として該營の役使に充てられ、新に一括營舍に集結された剩員は諸処の祇応の役使に充てられ、なお剩員中の余力ある兵士は帶甲剩員とされたのであって、剩員の分化は一段と明確になったといえよう。

## (二) 剩員再分化への流れ

前節で大中祥符五年前後、帶甲剩員、看管剩員などの分化区分の明

確になった点を指摘したが、帶甲剩員について再言すれば、先の具体例は河東の強壯なる剩員よりなるものであった。どの様な経過で生じたかを更に尋ねるならば、そもそも河東・河北にあった広銳軍等はこの年老病者の帰農を行っているが、<sup>(2)</sup>広銳軍の場合、宋史(卷一八七、兵志一、禁軍上、建隆以來)の侍衛騎軍、広銳には、

大中祥符五年、以其退兵為帶甲剩員、旧河東指揮三十一、陝西七、とあり、その際、帶甲剩員も設立されている。同書同卷の神銳軍(侍衛屬)にも、

咸平六年、料簡河東兵立、大中祥符五年、以本軍及神虎兵年多者為帶甲剩員、

とあるから、河東の諸軍は帰農の処置をとると併せて帶甲剩員の設置を行ったといえる。当時は景德元(一〇一〇)年の澶淵の盟の成って程ない時期だけに河東で帰農による省兵を行う一方でなお軍事力に不安もあり、それが帶甲剩員という剩員の一分化を生じたものであろう。

次に看管剩員にも一言すれば、これこそ剩員の本流とみなせるが、大中祥符五年に剩員額が定められ、別に帶甲剩員や諸処の祇応につく剩員もあって、その剩員中に占める比重は軽減したかに思われる。然し、淳熙三山志卷一八、兵防類一、剩員指揮 によると、慶曆五(一〇四五)年以降に関する年次の記載に、

嘗有戰功、應放停者、亦減充看管不管事剩員、其衣糧等、各得元来之半、終其身、

とあり、戦功ありし者は衣糧半額支給がなされ、一般剩員と區別なく、

しかも終身その地位にあり、何等の役使にも就かぬと解される不管事看管剩員となったというから、看管剩員が更に分化が進んだことを承知すると共に、疲老の兵士を直ちに罷免せず、老後を考慮する意味で設置された剩員の本旨は、ここにこそ維持されているといえよう。

最後に看管剩員とは別に独自の営舎にあって諸処の祇応に充てられた剩員に關つては、宋史(卷一八七、兵志一、禁軍上、建隆以來之制)、侍衛歩軍、神衛に、

大中祥符後、剩員又有帶甲、看倉草場、看船(營カ)之名、凡四等、皆選本軍年多者補、

とあるうちの看倉草場(看倉庫、看草場)剩員がこれに相当すると思われる。諸処の祇応とは看倉庫、看草場といった役使が考えられることになり、役使の具体的内容の一端を察知せしめると共に、役使の多様化がその背後に予想されるのであって、役使の分類の面から剩員の分化はより進行していたとみてよからう。

要するに大中祥符五年前後、剩員は大きくは三分化の形で捕えることが出来たが、更にそれぞれも分化していたと解されるのであって、時間の経過と共に更なる分化が予想されるのである。その様な点を考慮しつつ、次節に帶甲剩員の推移を尋ねたい。

#### (B) 帶甲剩員の衰退

大中祥符五年を一つの契機に剩員の新たな分化が認められたが、その後の推移を先ず帶甲剩員から尋ねるならば、仁宗朝に至って西夏との和約もなったためか、次第にその組織に乱れが生じた如くである。即ち、長編卷一九五、仁宗嘉祐六(六一〇)年十一月丙申条に、

馬軍司言、咸平県就糧武騎帶甲剩員四指揮、共管一百二十人、不成隊伍、虛占營壘、欲乞并為一指揮、從之、

とあり、開封府下の咸平県所在の帶甲剩員も併合の処置がとられている。もとより全ての帶甲剩員に併合縮少の傾向がみられるわけではない。長編卷二六一、神宗熙寧八(七五)年三月庚申条には、

詔、陳留県置竜衛帶甲剩員兩指揮、雍邱県置雲騎帶甲剩員一指揮、各以四百人為額、不給馬、雲騎請給視武騎、從樞密院請、以処竜衛雲騎退卒也、

とあり、神宗朝に降つてではあるが先の武騎と同じ騎軍である竜衛、雲騎の帶甲剩員が畿県で増置されている。しかし馬匹の配備はないというから、軍事力としては期待されなかったといえる。加えて永続性についても、宋史(卷一八八、兵志二、禁軍下、熙寧以後之制、侍衛騎軍)の竜衛には、

(熙寧)九年、陳留併帶甲剩員二為一、(中略)元豐元(七五)年、陳留帶甲剩員、闕勿補、(中略)六年、廢帶甲剩員、

とあり、以後、併合、廢止の途をとり、雲騎も、

(熙寧)八年、置帶甲剩員一、(元豐二年)十月、雍丘帶甲剩員第一改橫塞第六、

とあり、改廢されており、先の武騎の場合も、

熙寧元年、廢咸平帶甲剩員為剩員、(中略)八年、置帶甲剩員一、九年、以雍丘帶甲剩員一隸雲騎帶甲剩員、共為一、(中略)十年、廢帶甲剩員、元豐元年、併帶甲剩員亳州第一、

とあり、雲騎と連動して改廢されていて、永続性は認められない。右

は京師周辺の侍衛騎軍の帶甲剩員の事例に過ぎぬが、帶甲剩員の有用性喪失の一端を示すものと考えられる。ではこれと併せて一般の剩員には如何なる推移が認められるのであろうか、淳熙三山志の記載を中心に辿ることとしたい。

#### (ハ) 剩員制の整備

大中祥符五年に剩員制に諸策の施されたことは既に指摘したが、その背景と思われる事情の一端を淳熙三山志卷一八、兵防類一、諸廂禁軍、剩員指揮に尋ねると、

大中祥符四年勅、諸路軫運使副巡行屬郡、同知通都監監押揀選本城牢城人員節級兵士、

とあり、大中祥符四年に諸路で揀選が行われているから、その際に疲老兵士の処置が問題となり、当然剩員も増加したと思われ、翌年の諸処置となったと解される。その後の推移の子細は不明であるが、西夏と和の成った翌年の仁宗慶曆五<sup>(一〇)</sup>年に至ると、長編には卷一五四、正月丙子条に韓琦の言があり、冗兵削減、財政輕減策に併せ、宣毅軍の処置にも言及するが、これをうけて同書同卷同年二月戊子朔条には、

分遣内臣、往諸路選汰羸兵、宮苑使周惟德京西路、……内殿承制張志福建路、黃元吉荆湖南路、供備庫副使盧道隆荆湖北路、諸州宣毅軍過三百人者、無得更募、用韓琦議也、

とある。この限り宣毅軍整備の処置が施されたのみの如くであるが、この処置の適用された福建路に含まれる福州の地志である前記三山志

の剩員指揮の記載をみると、

慶曆五年、乃差内臣往福建等路、揀選其就糧禁軍及本城兵士、如病患可医者、減充半<sup>(3)</sup>分剩員、久或不堪、與放停公拋、若曾有戰功及陣亡人弟姪子孫、令仍旧、自後、歲委監司分揀、於是有剩員指

揮<sup>(4)</sup>、とある。長編の記述に照応するとみてよく、これによれば、宣毅軍に限らず全就糧禁軍に揀選が加えられ、病患可医者をもって剩員に充て、その兵額も一指揮を形成する程であつて、各州に剩員指揮が布置されたと解される<sup>(5)</sup>。

ここに剩員の新たな整備展開が認められるが、その後も諸軍の揀汰と併せて剩員整備の処置が施された如くである。長編卷一六七、皇祐元<sup>(四九)</sup>年十二月壬戌条には、

詔、陝西保捷兵、年五十以上短弱不任役者、聽婦農、若無田園可歸者、減為小分、<sup>(6)</sup>初、樞密使龍籍與宰相文彥博、以国用不足、建議省兵、衆議紛然、陳其不可、<sup>(7)</sup>中略、彦博與籍共奏、今公私困竭、上下皇皇、其故非他、正由養兵太多爾、若不減放、無由蘇息、<sup>(8)</sup>中略、上意乃決、於是簡汰陝西及河北河東京東西等路羸兵無慮八万余人、其六万余、悉放婦農、其二万余、各減衣糧之半、<sup>(9)</sup>

とある。要するに皇祐元年当時、養兵の負担輕減のため省兵が立案され、陝西その他西北辺の兵士六万余は婦農させ、婦農なき二万の兵士は衣糧の半を減ずるというものであり、陝西の保捷兵士<sup>(7)</sup>にあつては、

その対象は五十歳以上、短弱不任役者であつて、帰郷なき者は小分に充てるといふものである。一方、宋史卷一九四、兵志八、揀選之制には、

皇祐元年、揀河北河東陝西京東西禁廂諸軍、退其罷癯為半分、甚者給糧遣還鄉里、係化外若以罪隸軍、或嘗有戰功者、悉以剩員処之、

とある。衣糧之半、小分、半分ならびに剩員なる語句の詳細なる検討は別としても、先の長編と本記事とは対応関係にあるものとみて支障なく、両記事により、皇祐元年には広範な省兵の処置の一環として剩員が生じたことは間違ひなからう。従つて、以後も省兵や冗費問題の存在とともに剩員の問題も生じ、剩員の整備が考慮される必要があるといえよう。

揀選が行われ、冗費削減のため冗兵が整理された結果、剩員が増加すれば、例え彼等に従来の半俸を支給したに過ぎぬにせよ、新たな対策が必要なるはいうまでもない。そこで剩員にも年齢や定員の制限が考慮されて当然であらう。先ず年齢については、歴代名臣奏議卷二一九兵制に、

(慶曆)八年、右司諫錢彥遠上奏曰、「欲乞」及遇揀選半糧剩員之時、並委自逐州當職官吏審驗、六十五(以)上如堪執役、即且存留、七十以上、一例放停、云云、

とあり、六十五歳、七十歳での区切りが考えられていた。そして三山志卷一八、剩員指揮の先掲の「於是、有剩員指揮」の割註には、嘉祐

編勅として七十歳以上の者と病患医治に堪えざる者は「即給公憑放停」とあり、嘉祐年間(一〇五六)に七十歳定年は明文化されていたことが判明するが、更に続く三山志の本文を掲げると、

然非疾病或衰老不任戰禦、視歲數有減切法、諸廂禁卒、自十將至押官、六十五減切、七十放停、長行六十減切、六十五放停、惟副都頭以上、独免減切、至七十則放停而已、

とある。これによれば減切法ともいふべきものがあり、一般兵士に相当する長行にあつては、六十歳で減切、つまり剩員の年令に該当し、六十五歳で放停されるのが一般であり、先にみた七十歳の年令制限は十将以上の地位の者であつたことになる。先の長編皇祐元年の記事で陝西保捷兵士は五十歳を目安に帰農(或は剩員に充当)させたところのは省兵が急務であつた際の特例とみるならば、一般には六十歳で剩員、六十五歳で放停されたとみてよからう。次に定員については宋史卷一八九、兵志三、廂軍の大中祥符五年の記事に、

又殿前侍衛馬步軍司、自來揀下披帶禁軍、量減衣賜月糧充剩員、並無定額、散在逐營拘繫、不獲營生、

とあり、先には定額も定営もない様であるが、三山志卷一八にもみた如く、同年に剩員指揮が設置されており、定営とともに定員の設定が予想される。同書同卷、剩員指揮には、

(熙寧)十年勅、逐州就糧禁軍廂軍、通計十分立一分為剩員額、聽于旧營居住、遇出軍、每指揮留守營、常二十五人、仍著為令、とあり、神宗朝のことであるが、定員は兵員の一割を基準とした如く



で、具体的数値を同書に尋ねると、更に続けて

元豐元年本州申、廂禁軍剩員、見管二百八十九人、時就糧禁軍廂軍共九指揮四千三百人、当以四百三十為額、

とあり、規定にかなり不足し、充足の努力がなされている如くであるが、割註には、

時合揀四百三十人、本州申、員鎖、差使剩員已足、乞以見管人数為額、

とあり、規定に不足するも、必要とする差使には充足することから、結局は現状をもって定員とした如くである。ともあれ、剩員の定数も制定されたとみてよく、地方では兵員総額の一割が期待されていた。一方、中央では差使の必要額が定員を左右した如くで、宋会要稿によれば、

(大中祥符) 七年二月詔、倉草場神衛剩員、以三千為額、(食貨六、京諸倉)とあり、神衛剩員の役使に充てられる者は、真宗朝で三千人であったが、

熙寧中、裁定神衛剩員万有千人、建官置局総領、以均役、官制正名、(職官三、殿前司、) 歸歩軍司、

とあり、神宗朝には増大いぢるしく、裁定の処置の下で一萬一千人に及んでいる。

要するに、剩員は疲老兵士という如き曖昧な規準で設置された段階から、病患可医者とか六十五歳迄の者という疲老の程度も明確にされ、更に地方にあっては廂禁軍の一割とか、中央にあっては神衛剩員一萬

一千といった額数も定められ、整備が加えられたのである。

では整備の過程で剩員は如何なる統属にあったのであろうか、この点も次に一瞥しておきたい。

#### (1) 剩員の統属

もとより剩員額も少く、本属の役使に従事する段階での剩員の統属關係に注目する必要はそれ程ないが、前節に掲げた如く、神衛剩員が一萬一千にも及び、諸処の祇応に充てられたとすれば、その円滑なる運営上、剩員の統属指揮の問題は重要である。事実、前節の神衛剩員一萬一千は、熙寧中に建官置局とともに歩軍司への歸属が明示されたのである。

そこで先ず、中央剩員の場合を尋ねるならば、大中祥符七(一〇)年九月二十九日の詔には、

歩軍司、差剩員五人於御史台洒掃、不得抽差当直、(宋会要稿、職官五五、御史台)

とあり、御史台洒掃の役使に就く剩員は歩軍司の指揮下にあり、剩員の分化の進む真宗大中祥符年間には歩軍司との統属關係が重要であった。その後は役法に変化のあった神宗朝の推移が注目される。宋会要稿には、

剩員、旧隸歩軍司、熙寧中專置局、以拘轄差使、命提点倉庫草場沈希顔勾当、後亦命歩軍司兼領、(職官三、差使所、員所、神衛剩員所)

とあり、差使剩員所が設置され沈希顔が任につき、つまり建官置局され、剩員の役使は歩軍司から差使剩員所の指揮下に改ったのである。次で再び歩軍司が兼領したとするが、いずれも年次不詳である。宋会

要稿の同所には、

元符元(一一一〇)年八月、置歩軍司差使剩員所、以文臣陞朝官二員管勾、  
隷兵部、

とあり、哲宗朝に差使剩員所は再置しているから、歩軍司が兼領したのは差使剩員所が廢止されていたためと思われる。もとより差使剩員所も歩軍司差使剩員所とある如く、歩軍司の下にあったが、右に記す如く元符元年には兵部に隸すところから兵部の新な関与が認められる。そして、宋会要稿、職官一四、兵部、政和四(一一一四)年二月十四日条には、

詔、歩軍司所管廂軍剩員、今從令、兵部郎官措置差撥、

とあり、徽宗朝に至っても兵部の役割は重要であったが、右にも記す如く、歩軍司の所管ということを経統の面で重視しておきたい。

次に州の剩員の場合、宋史に、

州府以下、都監皆掌其本城屯駐兵甲訓練差使之事、資淺者為監押、

(卷一六七、職官  
志七、路分都監)

とあり、差使は都監の命に依った如くであるが、將兵制が施行された神宗朝にあつても、晁説之、嵩山文集卷三、奏議、負薪對 に、

乃有大臣喜變更祖宗之法度、兵制亦不得而在、合数州之兵以為一將、將重而州郡輕矣、州雖有兵之營幕、而簞于月食時衣、其号令之所加、進退之所繫、則在將而不在守臣、以都監而領剩員廂軍之外、不知將司一事也、

とあり、當時守臣の権限の抑制されたるを知るが、剩員は廂軍とともに

になお都監の宰領の下にあったといえる。このことは更に司馬光によつても確認される。即ち温国文正司馬公集卷五二、章奏、請罷將官劄子に、

国朝置總管鈐轄都監監押為將率之官、凡州縣兵馬、其長吏未嘗不同管轄、蓋知州則一州之將、知縣則一縣之將也、熙寧中謀臣建議、分天下禁軍、每数千為一將、別置將官以領之、訓練差使抽那、一出其手、其逐州總管以下及知州知縣、皆不得関預、量留羸弱下軍及剩員、以充本州白直及諸般差使而已、

とあり、州にあつては都監更にその上にある知州は將兵制には関与出来ぬものの、剩員の差使にあたる事が出来たのである。

これを要するに、中央の剩員は、歩軍司或は差使剩員所との、地方の剩員は、知州、都監との統属關係を有し、役使に充てられたのである。なお役使に際して白直に充てられたと司馬光は記すが、その他如何なる役使に剩員が就いたかを次に尋ねたい。

### 三 剩員の役使

#### (1) 兵士役使の背景

先ず宋代の兵士が軍務以外の役使に充てられた背景を考えるに、宋史卷一七七、食貨志上五、役法上に

建隆中詔、文武官、内諸司、台省寺監、諸軍諸使、不得占州縣課役戸、州縣不得役道路居民為逋夫、

とあり、国初官衙・官僚、中央・地方ともどもに農民の役使が禁止さ

れているが、このためには何等かの代替処置が必要となる。例えば右の通夫について、長編卷二、建隆二年五月乙卯条には、

令諸州勿復調民給伭置、悉代以軍卒、

とあり、兵士が代替している。この際、長編によれば五日前の五月甲戌に剩員の設置があることに注目しておきたい。即ち国初から剩員役使の条件は整っていたとみなせるからである。但し、兵士の役使が考慮される際に先ず念頭に浮ぶのは剩員よりも廂軍であろう。再度、宋史食貨志役法上の記載を尋ねると、

淳化五<sup>九</sup>年<sup>西</sup>、始令諸県、以第一等戸為里正、第二等戸為戸長、

勿冒名以給役、自余衆役、多調廂軍、

とあり、太宗朝の廂軍役使の程が察知され、降って仁宗朝にも、

慶曆中、令京東西河北陝西河東、裁損役人、即給使不足、益廂兵、とある如きはその一例である。では剩員は如何というに、神宗朝から哲宗朝に至る幕役法と差役法の変動期を例にとるならば、宋史食貨志役法上に、

先是差法既復、知開封府蔡京、如勅五日内、尽用開封祥符兩県旧役人数、差一千余人、以足旧額、右司諫蘇轍言、開封府亟用旧額

尽差、如壇子之類、近例率用剩員、今悉改差民戸、故為煩擾、以

<sup>10</sup>播成法、乞正其罪、とあり、募役法時代の剩員役使の一端が明らかにされる。なお募役法

実施は熙寧四<sup>七</sup>年十月であるが、長編卷二二、熙寧四年三月辛丑条に、

上論財用屈竭、以為皆緣置官多、王安石曰、以臣所見似不由官多、上曰、置廂軍五十余万、皆以当直迎送官人占使、安石曰、廂軍不專為官人占使、官人所以治人、既治人、須用人当直、上患其占人太多、以為呂公弼言、先朝待制、只破兩人剩員、安石曰、待制朝廷近官、職任已高、入則論議朝廷政事、出則鎮撫一路、只破兩人剩員当直、恐非先朝善政、云云、

とある。財政に関する神宗と王安石の論議であるが、必要とする要旨は、神宗が財政困窮の因として、官人に給使される五十万の廂軍の存在を指摘し、呂公弼の言によれば、前代の待制の当直には剩員二人のみであったとし、官人給使の廂軍の減額を論じたのに、王安石が反対したものである。これよりすれば、剩員の官人への差使は、募行法施行の神宗朝以前から行われ、支給額も規定されていたこととなり、神宗・王安石両者の共通認識として、剩員と廂軍は等置されている。要するに剩員と廂軍はほぼ等しい役使に就いていたためであろう。<sup>12</sup>ここに剩員の役使の内容が方向づけられることになるが、次節以下にその具体例を尋ねることとしたい。

#### (四) 剩員役使の具体例 その一

前節に農民の役使に代えて廂軍が充たり、剩員もこれに準じたるをみたのであるが、廂軍が多く地方にあるに對し、剩員は多く中央官衙・官人のための役使に就いたとみるのが一般であろう。先述の兩制に對する剩員二人もその一例と解されるが、この剩員に關つて、宋庠、元憲集卷三一、差当直兵士劄子 によれば、<sup>13</sup>

伏観、唐制、凡在京文武職官、自一品至九品、皆有防閑庶僕、州  
 県官僚、皆有白直執衣、<sup>(14)</sup>今来外任、自知州以下至簿尉、並給兵士  
 散從官承符手力之類、<sup>(15)</sup>品位至卑、猶給七人、名雖不同、其于供身  
 指使、猶用律文白直執衣之法、

とあり、知州らの外任官に唐制につながりをもつ兵士、散從官、承符、  
 手力の類が少くとも七人供されていた。中央では如何というに、宋庠  
 の右の一文の後節に、

国朝稽若古道、備衆官、惟在京臣僚僕從無準、竊見翰林學士及尚  
 書丞郎兩省給舍并待制以上、皆天子從官、並有呵引條制、其從人  
 則學士每員差開封府散從官各三人、待制以上二人、

とあり、官人の從人として散從官があり、兩制の場合二人であるとい  
 う。前節に掲げた兩制に与えられる剩員とこの散從官とは役割、人数  
 からいって、同等のものかと解されるが、ただ右の一文は続けて、

別差諸軍剩員各三人、每員共得六人至五人、

とあり、散從官と剩員は區別しているのであつて、規定人数からい  
 えば、前節引用の長編に記す兩制に當直する剩員二名は散從官であり、  
 別に剩員三名があつたことになる。かように兩制等には散從官と剩員  
 の當直の支給があるが、兩者を併せ「每員共得六人至五人」とするの  
 は、兩者の役使の内容が等置し得るものであつたためと思われる。更  
 には廂軍と併せて三者が混用される場合もあつたろう。加えて宋会要  
 稿、職官一五、糾察在京刑獄司 には、

(大中祥符二年七月) 十八日詔、給兩県手力十人歩軍司剩員軍士

#### 四人、

とあり、糾察在京刑獄司に京師附郭の開封、祥符兩県の手力と歩軍司  
 の剩員が併給されているから、剩員の役使は手力に類するものかと思  
 われ、更に遡つて、宋会要稿、職官二、進奏院 に、

(雍熙二年十月) 是月詔都進奏院、先於州縣輪差承符十五人、齎  
 送文字、宜令歩軍司、以剩員軍士代之、遣還本院、

とあり、都進奏院での文書齎送の承符の役使に代る剩員もあつた。以  
 上、名辞上に并記され、或は代替される事例を挙げたに過ぎぬが、剩  
 員の役使は兵士の一員として廂軍は勿論のこと、散從官、手力、承符  
 に相當するものであつたといえよう。

なお宋庠は唐代州県官に支給された白直に言及するが、宋代にあつ  
 ても、司馬光は「請罷將官狀」<sup>(文集卷四十七)</sup>で、神宗朝の將兵制に知州らが  
 関預出来ぬことに言及後、

及有差使、量留羸弱下軍及剩員、以充本州官白直及諸般差使と記  
 し、白直の役使に剩員を充てたとするが、更に後文に、  
 又頃歲以来、自轉運使知州以下、白直及迎送之人、<sup>(16)</sup>日朧月減、出  
 入導從、大為蕭条、供承荷担、有所不給、觀望削弱、無以威服吏  
 民、

と記し、白直の役使の大凡を察知させると共に、その不足を指摘する  
 が、続いて「臣略舉目觀一事、以証其余」として、具体的に西京洛陽  
 の巡檢下の兵士の不足を述べたあと、

通判以下諸官白直、往来防送、倉庫守宿、街市巡邏、尽出其間、

響者、先帝違豫、勅西京留守、親詣嵩山、起建道場、其將下禁軍充白直者、於条皆不得出城經宿、所敢留者、剩員七八人而已、西京天子別都也、其守禦不固如此、

と記す。神宗朝末期の洛陽のことであるが、剩員が白直の役使に禁軍とともに就いていたことと禁軍と異なる面を有することが判明する。かくて剩員が従官や手力、承符、更には白直としての役使に充てられたとすれば、その役使の対象は拡大する一方であるともいえるが、次に具体的にその対象の名辞の一、二を挙げておこう。

既に宋史役法の記事を引いて差役法復活に際する蔡京の処置にふれ、右司諫蘇轍の言をもって、剩員が壇子の役を果していたことを指摘したのはその一例であるが、これに関して蘇轍、欒城集卷三六、論差役五事状の第三事には、

新法以来、減定諸色役人、皆是的確合用数目、行之十余年、並無闕事、即熙寧以前旧法人数、顯是冗長、虚煩民力、今来二月六日指揮、却令依旧人数定差、未為允当、欲乞、只依見今役人数目差撥、若目前元差郷戸充役、後來却用剩員抵替、如場子壇子之類、

其剩員所費請受、合還運司者、即乞於前項坊場坊郭等錢支還、とあり、壇子の他に場子の役を果していたことになる。壇子・場子の子細については後考をまつことにして、蘇轍によれば本来郷戸のあたべき役使であつたわけで、白直に類する役使となり、同様な対象はお多数見出せることであろう。

以上、主として神宗朝前後の役法変更時を中心に尋ねた結果、剩員

は本来徭役としての散従官、手力・承符などの役務に代替する立場で役使されることが多かったといえよう。

#### (イ) 剩員役使の具体例 その二

前節に言及した剩員の役使の多くは官人に対するものが多かったが、一方では壇子・場子の如く広い意味で官衙に役使するものもあった。そこで官衙に対する役使を中心に尋ねるならば、先ずこの場合も単純な勞務に就くことが多かったであろうことは、剩員が疲老者を主体とすることから、予想されることである。倉草場の剩員の場合はその代表とみてよく、宋会要稿、職官二六、司農寺、熙寧三年六月七日条には、

制置三司条例司言、開封府百姓納草兵士五千人、所差数常不足、盖止以逐年科納草数多少差撥、緣輸納擁併、全籍衆力、挑撥積疊、方免住滯、及不損壞官物、欲乞、刻刷裝卸兵士倉草場剩員、常以四千人爲額、如不足、許差在京府界廂禁軍、候納及分数、以次減放、

とあり、倉草場剩員は他の諸兵及び百姓とともに納草に伴う全くの單純勞働に従事しているのである。勿論、剩員も單純勞働にだけ差使されたわけではない。長編卷八二、大中祥符七年三月乙未条に、

詔、南郊五帝壇齋宮、自今悉遣剩員軍士守護、とあり、警護の任に就く場合もあり、物品管理等にも従事した事例としては、宋会要稿、職官二九、裁造院に、

大中祥符三年七月詔、裁造院、於步軍司抽剩員二十人、巡宿看管

官物、通相寛察、毎季一替、旧十月一界、差剩員、為捧疊衣物者、不須別差、

とあり、文書の管理にもあたった事例としては、宋会要稿、職官一五、審刑院に、

(嘉祐六年)十月十二日、知審刑院傳求言、(中略)窃縁、本院日有奏到公案不少、院門別無閑防、欲乞、依在京糾察司例、專差皇城司親事官二人把門、免致別有漏泄、本院剩員十人束縛文字、今來本院屋共六十余間、雖有上下番剩員二人、難為看管、乞於十人内、特留四人、看管屋宇官物公案等、仍乞、依衆詳議官所破剩員例、支給口食、並從之、

とある。この際一言すれば、剩員の差使には右にみる如く分番就役のことが多く、官衙或は官人への役使を円滑に維持するには相当数の剩員を確保しておく必要があったといえる。<sup>(19)</sup>なお都進奏院で承符に代り文書齎送に従事した剩員については既にふれた。

かように剩員は單純労働をはじめとして、多様な役使に従事したが、労役従事とはいえ、特定された役使に従来する事例として、洒掃の役があった。即ち、宋会要稿、職官二八、国子監に、

(大中祥符)七年四月、詔歩軍司、選神衛剩員十人節級一人、赴国子監洒掃、不得別有占役、月給醬菜錢二百文、とあるのがそれで、同書、職官五五、御史台、大中祥符七年九月二十九日条にも、

詔歩軍司、差剩員五人、於御史台洒掃、不得抽差當直、

とある。いずれも国子監、御史台にあって洒掃の役使に剩員が指定されたといえよう。なお国子監の剩員には月に醬菜錢二百文が添支されている点、従前の給与のほぼ半額しか支給されていない剩員にとって、かかる役使の際の添支の存在は重要であったと思われるが、子細は後考にまきたい。

以上、官衙の役使に就く剩員の場合、守門、洒掃等の分化もあるが、労務たるに変わりはなかった。しかし宋会要稿、職官四、尚書省に

嘉祐元年十一月詔、尚書省司封、司勳……水部、自今並以未有差遣帶職京朝官領之、……仍各差提印剩員四人、

とあり、提印つまり公印の管理という労務的には軽い役使につく者もいたのであって、若し文字を知る剩員などであれば、より知的な役使に就き得たことと思われ、更に能力や機会に恵まれれば、剩員の地位からも脱け出せたものと思われる。その一、二の事例を挙げれば、先ず、宋会要稿、職官三六、翰林院に、

(元豐元年)十月二日、神衛剩員王拳為翰林医官、賜紫及綬三百、以治太皇太后疾有著効也、

とあり、神衛剩員王拳なる者は翰林医官にとりたてられている。<sup>(20)</sup>又、徽宗は九鼎を鑄たことで知られるが、その際登用された人物に方士とも隠士とも示される魏漢津がある。彼のことを資治通鑑長編紀事本末卷一三五、徽宗皇帝、大成案、の原注に引く楊氏編年にみると、

崇寧四年九月、蔡京用魏漢津鑄九鼎、作大晟樂、……漢津本剩員兵士、為范鎮虞候、見其制作、略取之、

とあり、宋史卷一二八、樂志三、崇寧元年条にも、

(魏)漢津至是年九十余矣、本剡員兵士、自云、居西蜀師事唐仙人李良、授鼎藥之法、……………或謂、漢津旧嘗執役於范鎮、見其制作、略取之、

とある。両記事を併せ考えるに、魏漢津は剡員兵士で、<sup>(22)</sup>范鎮に眞候として執役するうちに樂律の知見を深め、蔡京に見出されたとみてよく、その功により、

為虚和沖頭宝応先生、秩比中散太夫、賜宅一区田六十頃銀絹各五百疋兩、(資治通鑑長編紀事本末卷一二八、九鼎、崇寧四年九月乙巳条)

とある程である。剡員のうちでも疲老の身にもかかわらずなお單純労働に役使され、やがては罷退された者がある一方では、機会をつかみ、智能を働かせて榮達の途を得た者もいたのであって、剡員の役使は多様であつたといえよう。

#### 四 おわりに

以上、北宋の剡員の推移や役使に管見を加えたが、要するに剡員とは国初に老疾の兵士を罷免することなく、従来の功勞をも考慮し元俸の半額を支給して、当面の生活を保障すべく設置されたものとみてよく、その後彼等を無為に放置するを改め、制度の分化整備の処置をへて、諸種の役使に充てるに至つたものである。その際、再度選拔教閱を加へ成つたのが帶甲剡員である。一般には看管剡員の如く、原属の營処にあり雜事に奉仕するものがあつたが、剡員額の増加とともに整

理が加えられ、剡員指揮として別置されるものもあり、諸種の役使に充てられた。歩軍司に統属する京師周辺の剡員は官人、官衙の役使につき、その内容は地方の廂軍や散從官その他の役使に照応する面が多く、役法と関連する如くであつた。

右は小稿の要旨ともいえるが、剡員は南宋にも継続し、地方における役割においても無視出来ぬところがあつた。例えば、南宋の人王十朋の梅溪先生文集卷四、(夔州)再論馬綱状に、

(廂禁軍) 歸州所管、止百余人、其間又有剡員半分老疾患者、居其半、

とあり、地方における剡員の一般兵士との割合は相当の額に及んだ如くである。従つて剡員についての結論は、南宋剡員について考察し、加えて小稿では一瞥したに過ぎぬ剡員と役法との関連や後考にまつとした給与の子細等を尋ねた後に下さるべきであるが、あえて剡員設置や存続の意義にふれておけば、剡員を設置することで兵士の簡拔が容易となり、優秀兵士の保持が可能となつたばかりでなく、半額とはいへ疾老兵士に給与が支給され、社会不安の軽減がはかられ、又諸役に充当することで、農民の役法上の負担も軽減された如くで、綜合するに、剡員は宋代国家体制維持の一端を荷ない得たものとみてよからう。

#### 註

- (1) 宮崎市定「宋代の太学生生活」四、斎舎註④(アジア史研究第一所収)  
(2) 長編卷七八、大中祥符五年七月丁亥條參照。

(3) 半分剩員はこの場合半俸支給の剩員と解して支障なしと思うが、大分、小分などの用語と併せて後考をまちたい。

(4) 同様な記述は宝慶四明志卷七や雲麓漫鈔卷一二にもみえる。

(5) 従って、先到大中祥符五年に看管剩員以外に新営舎にあつて諸処の祇応にあてしめた剩員とは、中央にあつては、三衙諸軍から斥出されて設置された剩員(指揮)と解してよからう。

(6) この記事については、司馬光、涑水記聞卷五、参照。

(7) 保捷が咸平四年に陝西郷丁保毅より改った侍衛歩軍なるは、宋史卷一八七、兵志一、建隆以来之制 参照。

(8) 年令制限の子細については淳熙三山志卷一八、剩員指揮の割註記事参照。

(9) 宋会要稿 職官一四、兵部に、

神宗正史職官志、尚書兵部掌武學民兵廂土軍國簿及蕃夷官封承襲之事、(中略)廂禁土軍、因老疾而裁其功力之平為剩員、(下略)

とあり、兵部は剩員の登籍に關つており、同書職官三二、差使剩員所に、(熙寧九年八月)二十一日樞密院言、差使剩員所、乞今後故臣僚之家所破兵士剩員、有年高病患不堪祇應之人、并申兵部乞行差換、云云、

とある差使換替の記事などを参照。

(10) 宋会要稿、食貨一三、免役、元祐元年二月二十八日右司諫蘇轍の言、ならびに欒城集卷三六、乞更支役錢雇人一年候修完差役法狀 参照。

(11) 宋史卷三一一、呂公弼伝 参照。

(12) 南宋の事例であるが、慶元条法事類卷一一、職制門八、差破当直、吏卒令に、

諸官觀嶽差遣当直人(註)、差廂軍或剩員(註)、其不在本処供職者、於

所住処差、

とあり、宮觀等にも剩員、廂軍が差使されており、両者は役使の面で等置されている。

(13) この資料は既に周藤吉之博士が「宋代州県の職役と胥吏の發展」(宋代史研究)で引用されている。

(14) 防閑、庶僕、白直、執衣などについては、曾我部静雄「日唐の兼人制度」(律令を中心とした日中關係史の研究所収)参照。

(15) 散從官、承符、手力については、周藤吉之「宋代州県の職役と胥吏の發展」(宋代經濟史の研究所収)参照。

(16) この場合の迎送之人と必ずしも同一ではないが、周輝、清波雜志卷一に、

旧制、凡罷官三月、不赴部選集者、有罰、輝見著旧云、承平時、州縣多闕官、得替還郷、未及息肩、已竭蹶入京授見、次即趣赴上、一季半年、已為遠闕、到国門即入朝集門、支俸差剩員破官馬、事事安便、與今異矣、

とあり、赴任の際に剩員が支給されていた。

(17) 宋会要稿、食貨一三、免役、元祐元年閏二月四日、右司諫蘇轍言参照。

(18) とりあえず壇子については、宋会要稿 礼二、郊祀壇殿大小次、紹興十三年九月二十九日条、場子については、永樂大典卷七五二二、倉嘉定諸倉斛斗条 参照。

(19) 先の裁造院の剩員の場合、「毎季一替、旧十月一界、差剩員」とあり、季内で上下番に分れているとすれば、剩員の数は更に多くなる。

(20) 長編卷三九一、元祐三年十一月辛未条に

樞密院言、剩員上番、日破口食、若数多、可以分番、即不須別支、縁未有明文、詔、剩員数多処、許差二人、当兵士一名、仍分番、



とあり、この場合醬菜錢でなく口食米(?)が支給されているが、この添支は分番役使とも関連あることが明らかとなり、しかも剩員は一般兵士の半分の能力と考えられていたことになり、半俸と対応出来るといえる。

- (21) なおこの記事は長編卷二九三、元豐元年十月癸卯条にもあるが、注によって司馬光、涑水記聞にも関連記事のあるを知り得る。そこで同書卷一四をみるに、元豐元年冬の記事として、要旨「知邠州薛昌期の水疾を老兵王麻胡が治癒したので、召して太後の水疾を治癒せしめ、金紫、金帛を賜った」とある。王莘と王麻胡、剩員と老兵の相違はあるものの、同一内容を示すものとみてよく、多少の問題はあるが、老弱なる兵士ということで剩員を老兵と記す場合もあった如くである。

- (22) 魏漢津を黥卒とする記述が蔡條、鉄田山叢談卷三 にある。

(本学助教授・東洋史)